

早大図書館伊地知文庫『櫛葉抄』の翻刻と研究（下）：書誌および研究

著者	竹下 豊
引用	女子大文学. 国文篇. 2002, 53, p.45-59
URL	http://doi.org/10.24729/00011082

早大図書館
伊地知文庫

『榊葉抄』の翻刻と研究（下）

——書誌および研究——

竹下 豊

『女子大文学 国文篇』第五十一号、第五十二号（平成12年3月、平成13年3月）の二号に互つて、早稲田大学図書館伊地知文庫『榊葉抄』の翻刻を掲載した。本稿では、その『榊葉抄』についての書誌および研究を記すことにしたい。

一

「なら」あるいは「ならのは」を書名の一部に持つ典籍は少なくない。古くは嘉禎三年（一二三七）成立の素俊撰『榊葉和歌集』がある。また、飛鳥井雅親（栄雅）『筆のまよひ』を山口県立図書館本は「ならの葉」とし、水戸彰考館本は「榊葉」とする。それらの本を除き、「ならのは」を書名の一部に持つ本は、『万葉集』の抜書、注釈書類に多い。たとえば、宗祇の『万葉集抄』のうち、宮内庁書陵部本は「ならの葉」とある。また、早稲田大学図書館伊地知文庫『榊葉抄』を井上宗雄氏に

早大図書館伊地知文庫『榊葉抄』の翻刻と研究（下）

御紹介いただく契機となった牡丹花肖柏の『榊葉』は、「和歌連歌の創作面に参考にすべく、万葉短歌の中から特に好みにまかせて抄出したもの」であるが、冷泉家時雨亭文庫本「榊葉」、（注）島原松平文庫本「奈良之葉」、神宮文庫本「那羅農業」、水戸彰考館本「奈良濃葉」と表記の異なつた外題を有するものの、「ならのは」に変わりはない。さらに、江戸時代の万葉関係書では、「ならのは」に類するものとして、上田秋成『万葉集榊の柚』（寛政十二年（一八〇〇）起稿）、正木千幹『万葉集榊乃落葉』（文化十二年（一八一五）刊）などがある。

このように、『万葉集』関係書で、「なら（のは）」を書名に持つものは、

貞観御時、万葉集はいつばかりつくれるぞと問はせ
給ひければよみてたてまつりける 文屋ありす

神無月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふることぞ

これ

(古今・雑下・九九七)

に拠るものであらうと思われる。

早稲田大学図書館伊地知文庫「楮葉抄」も、このような万葉関係の一書であるが、寡聞にして他に伝本の存在を聞かない。おそらく孤本ではないかと思われる。

まず、「楮葉抄」の書誌について記しておくことにしたい。

袋綴、一冊。江戸時代後期写。縦二十二・六糎、横十六・五糎。表紙は無地薄緑色の紙表紙。外題は表紙の左上に打付書きで「楮葉抄」と墨書。右下に「伊地知文庫／文庫20／329」のラベルを貼る。本文の料紙は楮紙。墨で刷られた枠と罫が引かれた罫紙で、罫高は十八・九糎。墨付四十五丁、遊紙は後に一丁。一面十行書きで、歌・作者は一行書き。万葉歌の後の注文は三〜五字下げ。当該万葉歌を本歌取りした歌の右肩に出典名を記す。また、所々罫外(上部)に書入れがある。奥書の類はない。表紙見返し左下に「芝山蔵書」の長方形の朱の印記がある。また、本文二丁表一行目に「伊地知氏書冊」及び「早稲田／文庫」の朱の印記がある。

現在の寸法は右に記した通りであるが、表紙を付した際に化粧裁ちされたらしく、二十二丁表の罫外(上部)に五行に分けて書かれている「中務 中務／水増るにふの／川せの五

月雨に／袖人しらぬ／ 楨ながす也」の各行の頭の「水」
「川」「袖」は、それぞれ半字分ほど切れている。

ところで、この「楮葉抄」は、翻刻の際に底本の現状について注記したごとく、ミセケチや、白く塗抹したり、その塗抹した上に訂正語句を書いたりしている例が少なくない。これは、本書が草稿本であることを示す証左のようにも思われるが、おそらくそうではないだらうと考えられる。

たとえば、書写の際の誤写を訂正したと思しき例が挙げられる(以下、引用歌に付した歌番号は、翻刻に際して付した番号である)。

174 ひこほしのかさしの玉の妻こひにみたれにけらし此川の
せに 間人宿柵

この歌の「ひこほしのかさし」の八字は、「をくれゐて我恋」を白く塗抹した上に書かれているが、これは、その前の歌、

173 をくれゐて我恋をれば白雲のたなひく山をけふかこゆらん
同

の「をくれゐて我恋」を目標りによって誤って書いたのを、訂正したものであらう。同様に、

195 冬過て春はきぬらし春霞朝日さすかすかの山にかすみた引 同
では、三句目「春霞」にミセケチ符合を付し、「朝日さす」を

傍書しているが、これも一首前の、

194 きのおこそとしはくれしか春霞かすかの山にはやたちに

けり 同

の三句目「春霞」を誤って記し、後に訂したものであろう。この場合は、両首とも四句目に「かすかの山」があり、目移りの起りやすいケースである。

277の注 終括夜をさむみかりはのをのに鳴鹿のなれはまさらぬ妻

をこふらし 光成

の作者名「光成」は「忠房親王」を墨線で消した横に書かれているが、これもすぐ後に、同じく本歌取りした歌として挙げられている、

新撰告はしたかの尾ふさのすゞをなら柴のなれはまさらで立き

す哉 忠房親王

の作者名を誤写したものを、訂正したものと思しい。

いまは親本を誤写し、それを後で訂正したと思われる例は三例にとどめておくが、そのほかに、親本をそのままに写し、空白になっていると思しき例が挙げられる。

121 わかせこをこちこせ山と人はいへと君もきまさぬ山の名

空 白

315の注文

早大図書館伊地知文庫『栞葉抄』の翻刻と研究(下)

新古に入。よみ人しらずとす。これをとりて、

新勅空 白 ゆらく玉のを絶ざりしひと計だに逢みてし哉

などの例は、親本が何らかの理由によって当該箇所が空白になっていたのを、そのまま写したのであろう。121は『万葉集』巻七・一〇九七の歌であり、空白部分は「にあらし 同(120)作者不詳をうける」とあるべきところである。315の注は、空白部分の肩に「新勅」とあり、『新勅撰集』七三八番の歌である。出典の勅撰集名が記されているのであるから、欠脱部分を容易に補うことができたはずであるが、それが空白になっているのは、少なくとも当該箇所は親本を忠実に書写したものと考えてよいであろう。

このような欠脱箇所は、一首の句単位だけでなく、一首全体を欠く例も見られる。

233 恋しなはこひもしねとや玉ほこの道行人にこともつけ、

ん 柿本朝臣人丸

これをとりて、

234 ひとりぬとこもくちめやもあやむしろをになるまで君

をしまたん 作者不詳

とある233の注がその一例である。そもそも、この箇所は不完全である。233歌(万葉・二三七〇)は『拾遺集』(恋五・九三

七)に入集しているのだから、まず、

拾遺に結句ことづてもなきとして入。

と述べた後、「これをとりにて」として、本歌取りした歌を掲げ
るべき箇所である。もつとも、この「植葉抄」には、当該歌が
勅撰集に入集しているにも関わらず、まったく言及していない
例も見える。たとえば、

189 梅のはな咲る岡へに家居せはともしくもあらし鶯のこ
ゑ 作者不詳

250 みやき引泉の袖にたつ民のやむ時イヤスむときもなく恋わたるか
も 同

の二首は、それぞれ、『風雅集』(春上・五五・よみ人しらず)、
『新勅撰集』(恋二・七二二・よみ人しらず)に入集しているが、
そのことについてまったく触れないばかりか、歌のみ引かれて
注文は一切ない。

したがって、233歌の注文に「拾遺集」に入集している旨の記
述がないのは、特に異とするには当たらないが、「これをとりにて」
の後に、たとえば、

夏草はしげりにけりな玉梓のみち行人もむすぶばかりに

(新古今・夏・一八八・元真)
たまばこの道行びとのことづてもたえてほどふる五月雨の

空

(新古今・夏・二三三・定家)

のごとき歌が書かれているべきはずであるが、その歌はなく、
次の234の歌を詰めて書いている。これは、親本にあった一首を
脱落させて写したか、親本に欠脱していた通りに写したかのど
ちらかと看做してよいと思われる。当該書が、著者の草稿本で、
その箇所に入集した歌を書くつもりであったのに、それを見
出だせないまま、次の万葉歌を書いてしまったということでは
ないだろう。

右の例とは別の箇所、空白行がそのまま残っている場合も
ある。

313 鳩トビとりのおきなか、は、たえねたえねとも君にかたらんことつ
きめやも

新勅に第四句君にかたらふとて入。

源氏物語に、

〈一行空白〉

大伴宿禰家持

314 ふなきほふ堀江の川のみなきはにきゐつ、なくはみやこ

とりかも

この313の注文の「源氏物語に」の次行が一行空白になっ
ているが、ここには、本来、313の万葉・四四五八を引歌にした、

まだ知らぬことなる御旅寝に、息長川おきながと契り給ふことより
ほかのことなし。
(『源氏物語』夕顔)

についての言及が為されるはずだったと思われる。この箇所も、親本の空白行をそのまま引き継いだものと思しい。

以上、当該の『栞葉抄』が草稿本そのものではないことを述べてきた。しかし、その記述の仕方は、往々にして一貫性を欠き、注文の記されていない箇所もあることから、早稲田大学図書館伊地知文庫『栞葉抄』の親本は、完成稿ではなく、草稿的な性格のものであったと考えられる。

一一

早稲田大学図書館伊地知文庫『栞葉抄』には奥書の類はないが、当該本が江戸時代後期の写本であることはまず動かない。本節では、その成立時期について少しく考えてみたい。

『栞葉抄』には、「近代」という語が三箇所見える。

① 65の注

近代、武者小路実陰公此歌を取て、

春日の、野守やたねをまくあはの色にぞまがふ女郎花哉

② 76の注

明るよををじかのつもの、つかのまも夏の、露にやどる月

早大図書館伊地知文庫『栞葉抄』の翻刻と研究(下)

かけ

奥の歌は、近代の歌にておもしろくとりたり。

③ 225の注

色になる小田のほむけの秋風になれもかたよる村雀

哉 通村

此歌は万葉を本歌にせり。近代の歌にておもしろくとり給へるなり。

この三例は、抄出された万葉歌に拠った江戸時代の歌人の詠について述べたものである。このうち、詠歌時期の判明するのは、②③である。

②は、宮内庁書陵部蔵「御点取 万治 寛文」(501/804)に拠れば、万治二年(一六五九)五月十五日の点取和歌会の「夏月易明」題の詠で、長点を付されている。(注と)また、武者小路実陰の和歌に関する言説を門人の似雲が書き留めた『詞林拾葉』にも、正徳三年(一七一三)十二月十日条に、「後水尾院御長点の歌、夏月易明 烏丸資慶」として、人麿の本歌とともに挙げられており、高く評価された一首である。

③は中院通村(天正十六年(一五八八)〜承応二年(一六五三)二月二十九日、六十六歳)の家集『後十輪院内府集』に収められている。

秋田

正保三・八・九内御座

色になる小田のほむけの秋かぜになれもかたよるむら雀か

な

(後十輪院内府集・六八二)

この『後十輪院内府集』の歌の肩の注記から、③の歌は正保三年(一六四六)八月九日の詠であることが判明する。

また、①は武者小路実陰(寛文元年(一六六一)十一月一日、元文三年(一七三八)九月二十六日)の歌で、孫の実岳(一七一〇一七六〇)が実陰の詠藻を編集した『芳雲集』に収められている。

野女郎花

春日野の野守や種をまく粟の色にまがへる女郎花かな

(芳雲集・一八六一)

実陰は②③の詠まれた後の寛文元年(一六六一)十一月の生まれであるから、①の実陰歌が、『榊葉抄』に収載されたもつとも新しい歌ということになる。この実陰歌の詠作時期は確認できないが、『榊葉抄』の成立時期を考えるうえで有力な資料となる。

ところで、①②③の歌は、版本として刊行された諸歌集にも収載されている。

①の歌を収める『芳雲集』は、宝暦十年(一七六〇)六月の

編者の跋によれば、桜町天皇(一七二〇〜一七五〇)に献上したところ、「芳雲集」の勅題を得たという。また、刊本の裏表紙見返しの奥付には、「天明七年(一七八七)丁未九月／出雲寺和泉掾／出雲寺文治郎」とある。^(注4)①が『芳雲集』からの引用とすれば、刊本によっていなくとも、『榊葉抄』の成立はもう少し降って、十八世紀中頃以降の成立ということになる。しかし、①の『榊葉抄』引用歌は四句目「色にぞまがふ」であり、『芳雲集』は「色にまがへる」とあるから、『芳雲集』から直接引用されたものと考えなくてもよいであろう。

②の資慶歌は『新題林和歌集』(夏下・二三九〇)に、③の通村歌は『新明題和歌集』(秋・二四七五)に入集している。そして、『榊葉抄』の歌本文とそれぞれの刊本の本文とは一致する。『榊葉抄』の著者が刊本に拠つたとすれば、その成立は、『新題林和歌集』刊年の正徳六年(一七一六)以後の成立となる(『新明題和歌集』は宝永七年(一七一〇)八月刊)。そして、それが本刊行後の間もない時期とすれば、①の武者小路実陰の存命中のことになる。

また、『榊葉抄』には歌書からの引用も散見する。21の注をはじめ度々引かれる『古来風躰抄』、110の『歌林良材集』、241の『類字名所和歌集』などがそれである。『榊葉抄』の成立時期を

考える場合、これらの歌書の引用が版本による可能性もあるから、その歌書の刊行時期を勘案する必要がある。いま挙げた歌書類の最初の版本は、すでに十七世紀に刊行されており、先に推定した『檜葉抄』の成立時期と矛盾はないが、もつとも注意すべきは237の注文である。

万拾穂に、拾遺集にけさはけづらじうつくしき人のと有、類句に、われはけづらじ人の手枕と有、可尋。人丸とす。『万拾穂』は北村季吟の『万葉拾穂抄』であり、同書と本文は一致する。『万葉拾穂抄』は、貞享元年（一六八四）三年に増補浄書して完成し、元禄三年（一六九〇）に刊行されている（奇しくも『古来風躰抄』の刊年と同じである）。おそらく『万葉拾穂抄』については版本以前の浄書本ではなく、版本に拠ったはずで、これを引く『檜葉抄』はそれ以後の成立と考えるのが妥当である。

なお、「類句」に、われはけづらじ人の手枕と有」とあるが、この「類句」は、どちらも版本として刊行された長野美波瑠著『万葉集類句』（五卷五冊、寛政十一年（一七九九）三月成立、同年刊）、賀茂季鷹著『万葉集類句』（三卷三冊、文化三年（一八〇六）初春刊行）のことではない。両書とも四句目は「きみがたまくら（手枕）」とある。ここにいう「類句」は、山本春正編『古

早大図書館伊地知文庫『檜葉抄』の翻刻と研究（下）

今類句」のことで、「ひ」の項に、

拾遺悉四 あさねがみわれはけづらじうつくしき 人のたまくらふれてし物を 人麿

とあるのが、それである。この「古今類句」は、寛文六年（一六六六）五月刊であるから、先に推定した『檜葉抄』の成立時期には抵触しない。

以上、いささか繁雑になったが、『檜葉抄』の成立は十八世紀前半以降と考えられ、ひとまず江戸時代中期頃の成立としてよいであろう。早稲田大学図書館伊地知文庫本は江戸時代後期の写本であり、その成立時期からあまり隔たっていない時期の書写と看做してよいと思われる。

三

『檜葉抄』の著者については不明であるが、著者について考える上で、手がかりになると思われる記事が『檜葉抄』の中にないわけではない。

その点で、注意されるのは次の64の注文である。

64 みちのくのまの、かや原遠けれと面影にしてみゆといふものを 同

（中略）

同
よしさらば散まではみじ山桜花の姿を面影にして 為家

此歌は本歌（万葉・三九六）のおもかげをしてといふ句をとれり。已達のしわざ也。草庵集に、

ながれての名社おしけれ思ひせく袖に涙の滝なくも哉
これは古今の石ばしる滝なくも哉さくら花手折てもこ
んみぬ人のためといへる歌の一句をとりたり。為家卿
頼阿ならではよみ叶へがたき事也。未練のものは本歌
の詞を上にも下にもをきて、その本歌ときこゆるやう
によむべき也。

64に抄出した万葉・三九六の歌の本歌取と認識した『続古今集』（春下・一二五）の為家歌を挙げるのは当然としても、それとは無関係に、古今歌の一句「滝なくも哉」を取った「草庵集」の歌をも挙げ、「為家卿頼阿ならではよみ叶へがたき事也」と述べている。「為家卿」という呼び方も注意されるが、ここでは特に藤原為家と頼阿が称揚されている。

『植葉抄』は、おおむね抄出した万葉歌を収める勅撰集とその本文の異同に言及し、さらに当該万葉歌を本歌取りしていると認めた歌を、勅撰集入集歌を中心に、その出典名とともに挙げてはいるが、私家集を挙げてはいる例もある。注文や歌の肩の注

記に出典歌集名が記されているうち、私家集の例は、新古今歌人の歌がほとんどで、家隆『壬二集』が五首（他に『玉吟』とする一首がある）、良経『秋篠月清集』と定家『拾遺愚草』が各三首といった具合であるが、これら新古今の有力歌人に伍して、頼阿『草庵集』から五首が挙げられている（64 72 133 181 230）。ここに『植葉抄』著者の頼阿への関心と評価をうかがうことができ。また、著者自身によるものか、書写者によるものか速断はできないが、早稲田大学図書館伊地知文庫本の野外（上部）に書入れられている本歌取歌四首のうち三首が為家歌である。そして、そのうち二首（106および111の野外）は『為家集』以外に出典を見出すことが出来ず、『為家集』からの引用かと思われる。ここにも『植葉抄』の為家への関心をうかがうことができるのである。

為家評価とともに頼阿とその家集『草庵集』への評価で、すぐに想起されるのは、先にも言及したが、65の注にその歌を引かれている武者小路実陰の言説である。実陰は『日本歌学大系 第六巻』に収める『初学考鑑』において、三条西実隆（遣遥院）とともに為家・頼阿を高く評価している。

つねく見もてならふべきは為家、頼阿、遣遥院殿等、つぎく忘れず見ならふべきは、三代集、千載集、新古今集、

新勅撰集、統後撰集等なり。

三代集のほかに見習うべき勅撰集のなかに、俊成・定家が撰者となつた『千載集』『新古今集』『新勅撰集』に続いて、為家撰の『統後撰集』が挙げられているのも為家評価を示すものであらう。

また、頼阿とその家集『草庵集』に対する実陰の評価は、実陰の和歌に関する言説を門人の似雲が記録した『詞林拾葉』にもよく表われている。

古人の秀逸を常に感ずべし。中にも頼阿の歌をつねに感得すべし。……草庵集はよき歌をぬきあつめたるものなり。……又歌書をよむには先草庵集を本として見れば、草庵集にて歌の意きこえかぬるゆゑに、おのづから外の歌書を見るやうになるなり。如い此心得るがよし。いづれとも取りとめずひろくみるはあしく、はじめは草庵集と心得て見るべし。
(正徳三年(一七一三)九月廿八日条)

歌の手本にはとかく頼阿の歌なり。似せそこなひてもけがはなし。
(正徳四年(一七一四)十一月廿七日条)
書物をひろく見て、よみかたに心をよする所は草庵集と心得べし。
(享保二年(一七二七)十一月廿七日条)

これらの言説が、第二節で推測した『栞葉抄』の成立時期と

早大図書館伊地知文庫『栞葉抄』の翻刻と研究(下)

ほぼ重なっていることに注意しなければならないが、『栞葉抄』が実陰著というわけではない。先に引用した65の注に「武者小路実陰公」とあるから、実陰を著者に擬することはできない。

「頼阿を讃仰するのは近世二条派の常である」^(注5)から、『栞葉抄』の著者を実陰周辺の二条家流の歌人とするのは、いささか速断に過ぎよう。しかし、この実陰は、享保年間には宮廷歌壇の指導的位置にあり、中御門・桜町二代の天皇に対して和歌師範をつとめ、古今伝授を伝えた二条家流の和歌宗匠的存在であったから、『栞葉抄』の成立時期をも勘案して、実陰の影響を受けたその周辺の歌人を『栞葉抄』の著者と想定するのも、あながち牽強附会の説ではないのであるまいか。少なくとも、実陰と同じ和歌圏に属する歌人あたりを考えていいのではないかと思うのである。

四

『栞葉抄』は、先にも述べたごとく、万葉歌を抄出した後、当該万葉歌を収める勅撰集とその本文の異同に言及し、さらに当該万葉歌を本歌取りした歌(本歌取りした歌と著者が認めた歌)を、勅撰集入集歌を中心に、私家集も含めて、その出典名とともに挙げるのが、基本的スタイルである。この注文のあり方で、

すぐに思い浮かべられる二つの歌書がある。

勅撰集に入集した万葉歌を調査した一書としては、本居宣長門の田中道麿『撰集万葉徴』三巻三冊がよく知られている。この『撰集万葉徴』の初稿本は、^(注7)「古今集」から『新統古今集』に至る勅撰集に見える万葉歌五八一首(再調稿本は六〇六首)を、詞書も含めて各勅撰集ごとに抜き出し、それぞれの歌の『万葉集』寛永版本における巻・丁数、題詞、作者、『万葉集』の原歌を記している。

そして、『撰集万葉徴』の初稿本は、その奥書によると天明元年(一七八二)四月の成立である。第二節で『檜葉抄』の成立は江戸時代中期頃と推測したが、成立時期から言えば、『檜葉抄』の方が早いものと思われる。『檜葉抄』に取り上げられた万葉歌は三一五首、『撰集万葉徴』に比べて歌数は少なく、しかもそのすべてが勅撰集に入集しているわけではないが、勅撰集に採歌された万葉歌に着目した最初の本格的な書として、和歌史的な意義は小さくないだろう。また、『撰集万葉徴』が『万葉集』の原歌を掲げてはいるが(各歌の一部に傍訓を付す箇所もある)、当該万葉歌の訓がわからなければ、勅撰集歌との歌本文の相違を理解できないのに対し、『檜葉抄』はその相違が注文中で触れられている。これは、その著述の対象者を異にする

のもその一因であろう。

さらに、本歌となつた歌をまず記し、その後それを本歌取りした歌を列挙する歌書として、『温故抄』がある。『温故抄』は、古今・後撰・拾遺三集から、後世に影響を与えた(本歌となつたり発想源になつたりした)歌を巻順に掲げ、その影響下にある歌(一首く数首)を列挙したもので、鎌倉末く室町末期の間の成立(恐らくはその間の早い方であろう)とされる。^(注8)成立の早い『温故抄』が勅撰の三代集の歌を取り上げているのに対し、『檜葉抄』は『万葉集』の歌を対象としている。その違いはあつても、本歌とその本歌取歌という取り上げ方は共通している。となれば、完本は内閣文庫三冊本のみで、彰考館文庫本・島原松平文庫本がその下冊に当たるといふ、^(注9)『温故抄』伝本の現存状況に照らして、その可能性は極めて低いが、『檜葉抄』が先行する『温故抄』を参照して、その万葉版を企図した可能性も考えてみる必要があるだろう。

三代集に、『万葉集』を原歌とする異伝歌・流伝歌が収められていることは周知の事実である。いま、『拾遺集』の歌を引く『温故抄』と『檜葉抄』が共通する万葉歌を取り上げている例を挙げてみたい。『温故抄』の引用は、現存唯一の完本たる内閣文庫本(三冊 201/13)による。

『温故抄』下

人丸

あし引の山より出る月まつと人にはいひて君をこそそまで

(拾遺・恋五・七八二)

二条院御時、うへのおのこども百首歌たてまつりけ

る時、忍恋といへるこゝろをよめる 刑部卿範兼

月まつと人にはいひてながむればなぐさめがたき夕暮の空

(千載・恋四・八七三)

千五百番歌合に恋

定家卿

久かたの月ぞかはらでまたれる人にはいひし山のはの空

(拾遺愚草・一〇九〇)

前大僧正慈鎮四季百首に秋夕

ながむとて人もたのめず月も出ずたゞ山のはの秋の夕暮

(拾遺愚草員外・五三三)

弘長二年十首歌講じ侍しに忍待恋を 大上天皇

われさへに又いつはりに成にけりまつといひつる月ぞかた

ぶく (続古今・恋一・九八四)

『櫛葉抄』

274 あし引の山よりいつる月まつと人にはいひていままつわ

れを 同

早大図書館伊地知文庫『櫛葉抄』の翻刻と研究(下)

拾遺に君を社までとして入。人丸とす。

新古今 君まつと聞へもいらぬ榎の戸にいたくな更そ山端の

月 式子内親王 (新古今・恋三・一二〇四)

新勅 来ぬ人を何にかこたん山端の月は待いで、さよ更にけ

り 雅経 (新勅撰・恋五・九六八)

右二首は本歌の心をとれり。

『拾遺集』は『万葉集』から直接採歌されているのではないから、結句が万葉原歌に一致しないし、当然『万葉集』に直接採った『櫛葉抄』とも一致しない。しかし、本歌取という点から

いえば、本歌取歌が、『万葉集』の歌を本歌としたのか、『拾遺集』の歌を本歌としたのか、速断できない場合もある。『櫛葉抄』が『温故抄』を参看したとすれば、『温故抄』の例歌をそ

のまま採るか、取捨選択するかして、さらに歌を補えばよいわけであるが、右の例では、両者の挙げている本歌取歌はまったく

重ならない。他の例は省略するが、『櫛葉抄』は『温故抄』を参看しているとは考えられないのである。

『櫛葉抄』は、後の『撰集万葉徴』に先立つ勅撰集入集の万

葉歌の調査であるとともに、直接的関係は認められないものの、

三代集出典歌を本歌取した歌を集めた『温故抄』の編集方針

を、同じく『万葉集』に試みた歌書ということが出来る。

五

先にも述べたごとく、『櫛葉抄』の『撰集万葉徴』との大きな相違点は、多くの場合、『櫛葉抄』が当該万葉歌を本歌取りした歌を勅撰集歌を中心に掲げている点にあり、これこそが『櫛葉抄』著述の大きな目的といわなければならない。『櫛葉抄』を繙けば、まず次のような記述例が目につく。

59 あへのしまうのすむ石による波のまなくこの比やまとし
おもほゆ 山辺宿禰赤人

新統古に結句都おもほゆとして入。よみ人しらずとす。

これをとりて、

新勅
岩の上に波こすあべの鳥つどりうき名にぬれて恋つ、

ぞふる 家隆

のごとく、当該万葉歌の勅撰集入集に言及し、次に「これをとりて」として本歌取りした歌を一首乃至二首挙げている例がそれである。『万葉集』巻七の十首、同巻十一の八首をはじめ四十八首について、このような記述が見られる（ただし、233は「これをとりて」の後に歌が挙げられていない）。

もう一つの多い叙述のパターンは、

15 たをやめの袖吹かへす飛鳥風都をとをみいたつらにふ

く 志貴皇子

統古に入。

新勅
飛鳥川河せの霧も晴やらでいたつらにふく秋の夕

風 真昭法師

統後撰
あすか川七瀬の淀にふく風のいたつらにのみ行月日

哉 順徳院

此外あまた本歌にとれり。

のごとく、当該万葉歌の勅撰集入集に言及し、次に本歌取りした歌を二首掲げて（二首の例もある）、「此外あまた本歌にとれり」と述べる例であり、この例は他に十四例を数える。二首または一首だけ挙げて、「此外あまた本歌にとれり」と言っているのは、例歌には多くの本歌取歌から代表的な歌を選んだということであろう。

このように、『櫛葉抄』の著述意図が、万葉歌の本歌取例を挙げることによつて、その手本ともいふべき具体例を示すところにあつたことは明らかである。したがつて、本歌取の方法にも言及されている。

7 よき人のよしとよくみてよしといひよし野よくみよ

き人よ君 天皇御製（天武）

上古の歌ながら句拍子よき重詞也。本歌にとるべし。

は、どのような万葉歌を本歌取りするかについての言及であり、

4 三輪山をしかもかくすか雲たにも心あらなんかくさふへ

しや 額田王

古今 三輪山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花や咲ら

ん 貫之

これは額田王の歌をとりて、上二句はそのまゝにて、

雲を霞にかへて、下句人にしられぬ花や咲らんとよめる妙なり。万葉はかくとりて社おもしろく侍れ。

は、手本とすべき本歌取歌を具体的に説明した一文とみることができらる。

11 さゝ波の国つみかみの浦さひてあれたる都みれはかなし

もイ き 高市古人

この歌をとりて、

千載 さゝ波や国つみかみの浦さびて古き都に月ひとりす

む 後法性寺

此上句本歌をそのまゝとりて、下句古き都に月ひとり

すむとよみ給へる各別のもの也。本歌を取に、二句の上

三四四字これを免すと詠歌大概にはの給へり。それは

大概の御教成べし。持統天皇の春過ての御製をとりて、

月清 雲はる、雪の光や白妙の衣はすてふ天のかく山

早大図書館伊地知文庫『檜葉抄』の翻刻と研究（下）

これは第三句より結句まで本歌にかはらず。されど一首の趣は別のもの也。已達のしわざなり。

これは藤原定家の『詠歌大概』に、

古歌を取りて新歌を詠ずるの事、五句のうち三句に及ばばすこぶる過分にして珍しげなし、二句の上三四四字はこれを免す。

とあるのを念頭においての言である。定家の説く本歌取の方法には抵触するが——もつとも定家の本歌取論が、実際の詠歌においては必ずしも規範性を持ち得なかつたことは、同時代においてさえ、多くの例があるが——、『万葉集』の本歌の三句をそのままの位置に取りながら、本歌取の成功した例として、後法性寺殿（藤原忠通）と良経の歌が挙げられている。

64 みちのくのまの、かや原遠けれと面影にしてみゆといふ
イみゆてふも
ものを 同

の注文では、先にも引いたが、

同統古

よしさらば散まではみじ山桜花の姿を面影にして 為家

此歌は本歌のおもかげをしてといふ句をとれり。已達のし

わざ也。草庵集に、

ながれての名社おしけれ思ひせく袖に涙の瀧なくも哉

これは古今の石ばしる瀧なくも哉さくら花手折てもこんみ

ぬ人のためといへる歌の一句をとりたり。為家卿頓阿なら
ではよみ叶へがたき事也。未練のものは本歌の詞を上にも
下にもきて、その本歌ときこゆるやうによむべき也。

というごとく、特に「未練のもの」といって、本歌取の方法に
ついて述べている。「榊葉抄」の類の歌書の多くがそうである
ように、この「榊葉抄」も、初心者あるいは已達の域に達して
いない歌人に、「万葉集」の歌を本歌取りする場合の手本とな
るべき歌を集めた歌書であることが、改めて確認されるのであ
る。

『榊葉抄』において、本歌取の例歌して挙げられている歌は、
勅撰集に入集しているものが圧倒的に多い。その歌のひとつの
評価として、勅撰集入集歌であることは、大きな意味をもつて
いるはずであるから、それは当然である。

この点に関連していえば、『榊葉抄』の著者には、勅撰集を
重んじる傾向が顕著である。

38 瀧の上のみふねの山にある雲のつねにあらんとわかおも

はなくに 弓削皇子

初五みよしの、として新勅に入。人丸とす。

万葉には意吉磨と有を新勅に人丸とせり。万葉御撰な
らざる故誤歟。又伝写の誤有にや。新勅に人丸と正し

くしるし給ふは、人丸集の正本を以考しるしたる成べ
し。当時流布せる歌仙集は正本に非ず。

48 いさやこらやまとへはやく白すけのまの、萩はら手折て

行ん 高市連黒人

風雅入。人丸とす。万葉には黒人とす。万葉と後の撰
集と作者異なる事前に注しぬ。作者は後の勅撰を以証
とすべし。又万葉に作者の姓名出たるも後の集にはよ
み人しらずとせる歌多し。是又その作者の慥ならざる
故歟。下皆是にならふべし。

38 は、『万葉集』と「後の撰集」である『新勅撰集』とで、
作者が異なっているケースである。『新勅撰集』の人丸を正し
いとし、勅撰集でない『万葉集』の誤り、あるいは伝写の間の
誤りとしている。また、「当時流布せる歌仙集は正本に非ず」
とも断じている。「当時流布せる歌仙集」は、正保四年（一六
四七）に刊行された歌仙家集であろうか。また、48では「風雅
集」と『万葉集』の作者名の相違について、「作者は後の勅撰
を以証とすべし」などと述べている。これらの発言は、勅撰集
の権威を重んじ、勅撰集を第一級の資料とする姿勢であり、勅
撰集からの引用歌が多いのと通底しているというべきであろう
か。

このように、「万葉集」の作者名よりも勅撰集のそれを絶対視する姿勢は、この『栞葉抄』の著者が、少なくとも万葉学者ではない可能性を示唆しているものと考えてよいのではないだろうか。これは、本稿第三節で、『栞葉抄』の著者を武者小路実陰の周辺の歌人と想定したことに対する傍証（第二義的なものではあるが）といえるかもしれないと思うのである。

本稿では、主として『栞葉抄』の成立時期や著者について臆見を述べた。引用されている万葉歌の訓、引用されている勅撰集や私家集の本文の問題、『栞葉抄』と江戸中期以降の歌人の実作との関わりの如何など、まだまだ考究すべきことはあるが、ひとまず本稿はこれで擱筆することにした。

注1 島津忠夫「奈良之葉をめぐって―万葉研究史の一資料―」（佐賀大学 文学論集）昭和41年8月。後に『連歌の研究』（昭和48年3月 角川書店）に「連歌師の古典研究」として改稿収録。

注2 上野洋三編『万治御点―校本と索引―』（平成12年2月 和泉書院刊）に翻刻されている。

注3 『歌学文庫 六』・『日本歌学大系 六』・『近世歌学集成

早大図書館伊地知文庫『栞葉抄』の翻刻と研究（下）

（中）（近世和歌研究会編 平成9年11月 明治書院刊）

『歌論歌学集成 第十五卷』（杉田昌彦・鈴木健一・田中康二校注 平成11年12月 三弥井書店刊）に所収。

注4 『新編国歌大観 第九卷』所収「芳雲集」解題（上野洋三氏執筆）

注5 鈴木淳「武者小路家の人々―実陰を中心に―」（近世堂上和歌論集刊行会編『近世堂上和歌論集』（平成元年4月 明治書院刊）所収）。なお、鈴木氏論文は、武者小路実陰の閲歴・歌歴・歌論・家集と歌風などについて論じており、本稿でも多大の教示を得た。

注6 注4に同じ。

注7 赤木邦輔・尾山篤二郎校訂『撰集万葉徴』（萬葉学叢書 第二編 大正15年8月 紅玉堂書店刊）に拠る。

注8 『和歌大辞典』（昭和61年3月 明治書院刊）の「温故抄」の項（井上宗雄氏執筆）。

注9 注8に同じ。